昭和 50 年代だと思われるが、戦友 2 人がダウを訪れ、撮影してきた写真と手紙

立春も過ぎ、春もすぐそこまきていると言いますのに、この二、三日の寒さはどうしたことでしょう。

皆様には、お変わりなく、お過ごしでいらっしゃいましょうか。

さて、先日（二月十日～二月十七日）ルソン島の戦跡巡礼に行って参りました。あのすさまじい激戦の跡、マニラ～ボンドック～九号線～バギオ～タルラック～マバラカット～クラーク～ダウ～マニラと一千粁を越える強行軍でした。

五日目、七四兵站病院跡に立ち、伝染病棟を目のあたりに見たとき、あの爆撃に散った林塚さんのことを思い、涙が止まりませんでした。あの日伝染病棟から私達の宿舎に遺体を待ち帰り、裏の花壇へ静かに眠らせましたね。あの強烈な悲しく想い出に引替え、建物や周りの景色の記憶が余りにも薄いのに、茫然としました。それでも病院からさほど遠くない松林、道路……宿舎の壁に石でつんだ二段位のささやかな花壇……二階建の宿舎……等……そんなかすかな記憶を頼りに、わずかの時間を使って、タクシーで探しまわりました。

ほとんどの家が新しく建て変えられ、その中に、わずか二、三軒だけが昔のままの姿を残していました。そのうちの一軒が私達の宿舎であったように思えました。もしそうだったら、何故、林塚さんが私達を待っていたのかとも思えました。その建物の住人は、一九五一年頃からの別荘の管理をしていると言い、持ち主はマニラで弁護士をしているとか。そして殆んど昔のままで、まわりもいじっていない……ものごとがあった思えました。家の中も見せてもらい、七〇パーセント位、私達の宿舎であったように思えました。にせ二人とも、断言する程の確かな記憶もないので、帰って参りました。

そこで、皆様にその建物の写真をお送り致しますので、当時を想い出して、いただきたいと思います。

建物の全景……玄関……柵……玄の花壇……松林等、良くご覧下さって、ご記憶をたどって下さい。

そして何か、お気付きたいなことと、確かな想い出がございましたら、是非、お知らせ下さい。

その結果で遺骨の収集のことなど、関係者と相談したいと思っております。

是非、お返事下さい。お待ち致しております。

藤永 都子

川崎 登子

当時伝染病室だったダウの教会

ダウの宿舎の玄関

バギオに建立された友たちの慰霊碑

祭壇に飾られた亡き戦友たち

マニラに到着して2か月ほどした１９４４(昭和19)年８月頃。本部から許可をもらった『偕行社(現在の公益財団法人偕行社)』が軍服や軍帽、軍靴の他に現地人のもの、米兵の所持品を売りに来たことがある。当時偕行社は軍品などの支給、販売を行っていたのだが、あきはこの時、時計を買い求めた。その10年ほど前、スイスで創業されたアルダス社が製造したもので、クラシカルで細身の時計。

ところが買い求めてすぐに動かなくなってしまう。諦めてリュックの中に入れてそのまま放置していた。余談だが、その後、実家に帰還して数日後に荷物の片付けを行っていると、リュックの中からこの時計が出てきた。不思議なことに動かなくなっていたはずの時計の秒針が動き、自宅の時計の針と同じ時刻を指していた。あきはそれから長年、この時計を愛用することとなる。

そうやって現地の生活にも慣れてきた頃、移動命令が下される。１９４４(昭和19)年９月、一回目の移動が始まった。あきの班は看護婦20人、婦長２人、書記１人、用務員が１人。あきたち大阪班と、大阪で教育を受けた福岡班が一つの班として一緒に行動した。

当時すでに、フィリピンの首都マニラから７０ｋｍほど先にあるコレヒドール島まで米軍が来ている

という噂が広がっていた。9月以降は日に日に空襲がひどくなり、敵機の来襲でマニラ湾が全面的にやられてしまう。1年前にマニラに上陸した他班の看護婦が救護活動をするマニラ市内の病院には、フンドシ1つで全身ヤケドの患者たちが病院の廊下まであふれ、状況は悪化の一途をたどり始めていた。

空襲があるたびに緑の毛布をかぶって、患者、看護婦共に草原に隠れる。重症の患者は前もって運び、動かすことが無理な患者は病院内に置いておくしかない。爆撃は病院には落とさないが、50㎞先に落とされても爆風で病院も人間も吹き飛ばされてしまうほど。

赤十字の教育には、赤十字条約のもと、十字のマークが設置された建物には爆弾を落としてはいけないという決まりが明記されているが、この条約も戦争となると守られることはなかった。兵站病院に危険が迫り、あきたち一行はダウを脱出。サコピア川を越え、ジャングルを北へ北へと向かう。

そうして着いたのが、ダウから50㎞弱ほど北にあるタルラックの街にある病院。しかし空襲は激しくなる一方で、すぐに引き揚げ、タルラックから北へ150㎞近く、山岳地帯の街・バギオに移る。

バギオもすぐに空襲が酷くなり、飛行機の気配がすると「まもなくだ…」と皆がパニックになった。大抵、飛行機のやってくる時間は決まっていたようで、「今日は終わった。もう来ないよね」と思ったもの。夜を迎える頃に「また飛行機がやって来る」等の指令が入る。結局バギオの病院も狙われ、やむなく行軍



を再開することとなってしまった。

行軍となった時は、数日分の食料が渡される。米、味噌、乾パンに塩の錠剤という粗末なものが一人ずつ配給された。当時マラリアに罹っていたあきは、とても行軍に混ぜてもらえる状況ではなかった。あてもなく山のほうに向かって逃げる。藪の中で「死んだ人の臭いがする」と思って近くに行くと、死体が転がっていた。栄養失調が原因だったのだろう。負け戦だと皆がわかっていた。味方の飛行機は飛ばなくなったその様子に負けを感じ取っていた。

ジャングルの中の逃避行は続く。現地の人が住んでいたような掘っ建て小屋を見つけては住まいにしていく。一人一人がもう立てない状態だ。季節は秋。田んぼの稲穂が人を隠すほど伸びていた。山間部であればあるほど稲の背は高い。食料がないため、兵士は稲穂を盗みに行くこともあった。女性は山谷を越えて行くこともできず、無理無理兵士からもらったりして飢えをしのぐ日々。

時折爆発音が聞こえる。

ヒュー、ドン！

「あっちに落ちたな…」

「さっきより近いぞ！？」
「私たちを撃つつもりだな…」

そんな会話が繰り返された。いつ、何処に落とされるかわからない爆弾の放射光にビクビクする時間の繰り返し。もはや諦めの気持ちすら生まれ、「殺すなら殺せ！」と開き直るしかない。

加えて罹患したマラリアの症状があきを襲う。震えが4時間、熱が4時間のスパンで交互に繰り返しながらやってくる。震えと熱がおさまっている間に行軍に合流した。周りはジャングル。草木をかきわけながら歩んでいくと、見たこともない三角頭のヒルが木に張り付いている。日本のヒルより細く、頭が三角。黒いヒルが腕や顔にいつの間にかくっついている。べっとりと張りついたヒルを手で払う元気もない。本当に気持ちの悪い光景だった。

あきたちが行軍していったところは、以前に日本兵が通った形跡があり、道ができている。つり橋以上に怖い橋や道が続いた。掘っ建て小屋では腐ったような臭いのする毛布をかけて5人ずつ寝る。秋も深まり、偶然に探し当てた小屋に日本製の臼と杵が残されていた。日本兵とあきたちは稲穂を摘み取り、臼で突いて玄米にし、その玄米を鉄兜に入れ、拾ってきた石でたたいて白米にして食べた。残った米ヌカは炒ってきなこにして食べた。何一つ無駄にできない状況だった。ヌカは食べにくかったが、これも命をつなぐための食料だ。稲穂を盗ったことがバレて、現地人から捕まった日本兵もいた。逆さにされて生き



埋めにされた。足だけが土の上に出ている状態。まさに見せしめだった。

盗んできたサツマイモの苗を育てたりもした。3か月ほどで食べることが出来るようになる。皆、栄養失調。やっとの思いで手に入れた食糧。火を焚いて、育ったサツマイモを飯ごうで煮て食べたり、焚いた後に出る灰の中に芋を入れて焼いて食べた。また、兵士が黒い山ブタを捕まえてきて、小屋の土間のイロリで煮炊きもした。子豚の足、まさにつま先だけ、兵士にお願いしてようやくもらい、きれいに洗って毛をカミソリで剃り、芋や米を煮炊きした時に出るアクで蒸し焼きにする。ブタの足の爪の裏まで焼けたら、2本の足を8人でほじくり分けて食べ合う。ほとんど骨だった。しかしそれが貴重な食糧であった。

水たまりにおたまじゃくしがいると、職業柄たんぱく源とわかるので、手ぬぐいですくい取り、水を入れた飯ごうにおたまじゃくしを入れて持ち帰る。帰ってから、イロリに木と木を挿して横木を通し、そこに飯ごうをかける。おたまじゃくしは苦くてマズかった。寝ている部屋にゴキブリが出た時はみんなで捕まえ、残り火で焼く。支給されていた錠剤の塩と、粉の味噌を調味料に皆で食べた。１９４５年（昭和20年）4月。終戦まであと4か月ほど。密林の中に地獄の光景が広がっていた。

そうこうしているうちに「ここから引き揚げることになった」と兵士から聞かされた。どこに引き揚げるのかも分からない。「日本に帰るか、アメリカにやられるか、フィリピンに置かれるかはわからない」

兵士も状況を飲み込めていなかった。もはや婦長や書記長らも分散してしまったため、正規の上司からの指示もない。傍にいる兵士の言うことを信じるほかない状況だ。

あきのグループ10人は荷物を持って山を下る。下ると、道路脇には米兵が随所に立っていて、とたんに恐ろしくなる。これからどこに連れていかれるのかもわからない。日本人に自由はなく、「これに乗りなさい」という指示のもと、米軍のトラックに乗せられていく。車から降ろされると、幕舎へ連れていかれ、全員身体検査を受ける。針、スプーン、フォーク、はさみ等を持っていないか調べられた。

前述の身に付けていた時計は日本製ではないため、「以前はアメリカのものだった」を理由に取られることも考えられた。そこで脱脂綿に包み、布でくるんでマスコットのキーホルダーのように腰にぶら下げ、その場を凌いだ。皆それぞれ考えて私物を持ち帰ろうとしていた。

テント張りの幕舎は屋根があり、人が立って歩ける十分な高さもある。ベッドもあった。幕舎で何もない日々が続いた。食べ物は米軍のもの。毎日脂の多いものばかり。山では脂ものは食べられず、塩をかけて芋を食べる生活を送っていたため、米軍の食べもので全員下痢が止まらない状態に。

そんな中、幕舎で世話をしてくれた、米軍の服を着ている日本人らしい人がいた。日本語も上手だった。「私は捕虜だ。逃げて歩いてきた」と言う。当時、日本では「捕虜は日本人ではあらず。捕まえられるような人間は日本人ではない」と考えられていたのだが、アメリカ側は考えが違い、「敵に捕まるほど敵陣近くまでやってきたことは勇敢だ」と考えられていたことから、丁重に扱われていたのだった。



舎内には以前、衛生兵として同班で働いた人の顔もあった。捕虜となり、終戦後山から下りてきたところを米兵に捕まったらしい。その姿はフラフラで、米兵が吸ったタバコの吸い殻を拾って吸っていた。とにかく哀れな姿だった。

同時期にフィリピンに派遣された埼玉県出身の武田寿(あきと同年生まれ)さんは昭和53年の取材にこう答えている。

---

「昭和19年12月にマニラからバギオに入り、翌年1月には大空襲を受けたため25人もの同僚が亡くなった。肉片が木々の枝に飛び散ってまるで花が咲いたようだった。その地では勤務できず、残された兵隊たちを大統領官邸近くの民家に移した。毎日のように空襲があり、松林に逃げ込んでも落下爆弾が松の枝などを焼き払ってしまう。とうとう隠れる所もなくなり、横穴を掘って傷を負った兵隊たちを収容。既に医薬品も器材もなく、患者の傷口にわいたウジを取ってあげるのが精いっぱい。19年暮れからは食料らしいものは全く無くなり、水ばかり。私たちもバギオを脱出するときは大さじ一杯の塩と乾パン1袋をもらい、終戦までは自給自足だった」。

幕舎は点々と変わったが、4か月もの間この生活が続いた。その間、個人調査があった。米兵やフィリピン人を殺した憲兵隊の役職についている人間と、彼らと同じ姓の人は親戚や兄弟ではないかと看護婦だろうが疑われた。関係があると疑われた人達は帰国を遅らせられることになる。

幕舎生活を終え、不安を抱きながらも軍用船で日本に帰されることになる。あきは後に「山口県か、岡山県の港に着いたと思う」と語っているが、改めて孫が調べたところ、当時外地からの引き揚げは検疫施設の問題もあり、特定の港のみと定められていた。本人の記憶では山口か岡山となっているものの、岡山には当時指定されている港がない。その後大阪まで3日かけて帰ったという話もあり、距離を考えるとほぼ間違いなく山口県の下関港だと思われる。

船から降りると検疫があり、その後旅費をもらって日本赤十字社大阪支部に挨拶に行った。病院に一晩泊めてもらい、乗車証明書だけをもらって、山形の実家に戻ることとなった。帰りの汽車の混みようと言ったら想像を絶するほど。身動き一つ取れない。皆乗りたくて、窓を破ってグイグイと車内に入ってくる。誰もが毛布をかぶっている。トイレにも行けず、持参した飯ごうに用を足す。そして窓から捨てる。乗車している皆がそうした行動をとっていた。

大阪で乗車し、上野で乗り換え、雪が降る12月。やっとの思いで山形駅に着いた。ホっとした。左沢線に乗り換え、左沢に到着。着いた頃には故郷の朝日町へのバスも終わっていた。



途方に暮れていると、とある女性に「嬢や、何処に行く？」そう声を掛けられた。あきはか細い声で「宮宿まで…」と答える。

「私も宮宿だ。一緒に行くべな。何処かに行ってきたんだが？」この辺では見慣れない男の格好をしているあきに、その女性は尋ねた。フィリピンから帰ってきた旨を説明する。「そういえば(朝日町)前田沢からフィリピンに召集された娘さんがいると聞いたな」と女性にも心あたりがあったようだ。

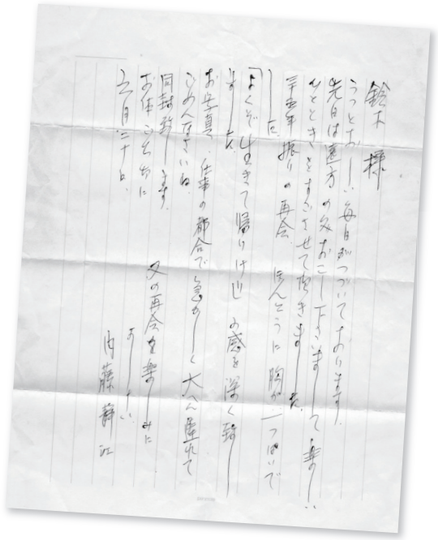
雪が降りしきる。

道は車も通れず、人一人がようやく歩けるほど。1mほどしか幅がない。狭い道を、夜行の汽車で大阪から来たこと、戦争の話をしながら、三里の道を2人で歩いた。

マラリアに罹っているあきにとって、三里の道は遠かった。道中、女性は「それじゃ腹減ったべ。歩きながら食べて」と、醤油味か味噌味だったか定かでないが、自分の焼きおにぎりを渡してくれた。空腹のあきには、その気持ちがただただ身に染みた。後で知ったことだが、その女性は朝日町杉原の安藤ミエさんという方だった。この方がいなければどうなっていたか分からない。

昭和20年12月25日、クリスマス。あき23歳は、実家に戻った。髪は散切り、顔は真っ黒。62kgあった体重は38kgに。兵士の上着を着て、山形に戻る時に友達が赤十字の制服のワンピースをリメイクしてくれたズボンを履いていた、変わり果てた娘の姿を見て母は驚いた。そして涙が止まらなかった。あきも涙が止まらなかった。

家の仏壇には陰膳がそなえてあった。娘の無事を祈る母の必死の願いが、そこにあった。青春時代を戦争に翻弄されたあきは、フィリピンで買った時計と共に、故郷に戻ってきた。



マニラ会後に友人から送られてきた手紙

昭和55年5月31日に開かれた「マニラ会」で、戦友たちとの再会

福岡県大野城市牛頚2375中央公園に完成した(昭和63年)
第138兵隊病院慰霊碑

# 余話

◇現地から背負ってきた背嚢(はいのう：兵隊が使っていたリュック)に入っていたもの

…やしの実を2つに割り、底の部分を削った飾り物／フィリピンで手に入れたレースのテーブルセンター2枚／時計／生理用品／死ぬことを覚悟した時に使うモルヒネと注射器／ビタミン入り注射液／着替え数枚

◇実家に戻り、3日程経つとマラリアの発作が起きた。70kgの母や小学生だった2人の妹があきの身体の上に乗って身体をおさえ、震えを止めようとするが吹っ飛ばされてしまう。震えで舌を咬まないようにと、ガーゼを巻いた割りばしをくわえさせる。震え4時間、熱4～5時間、あわせて9時間強もの間耐え難い状態が続く。震えが止まると次は高熱。ものすごい頭痛と寒気に襲われる。外の雪で水枕を作ってもらう。大抵、朝食を食べ終わる午前8時頃に発作が起きる。町の医者を呼ぶが、マラリアに効く薬は無いという。マラリア用の薬〝キニーネ〟を処方してもらえるよう証明書をもらってきていたため、一日かけて県立中央病院に薬をもらいに行く。マラリアはハマダラカという蚊に刺されることが原因。一般的な伝染病と違い、毎日発作が起きるというわけではない。気候にものすごく左右されるため、季節や天気の変わり目に発作が起きる。例えば、朝起きて雨模様の日であれば全身に悪寒が走る。天気の変動がなければその間は何事もない。いずれにしろ、夜8時頃になると発作はおさまり、食欲も出てきてけろっと直る。38kgの体重が51kgまで増え、次第に体力が付いてくると発作の感覚が長くなってきた。

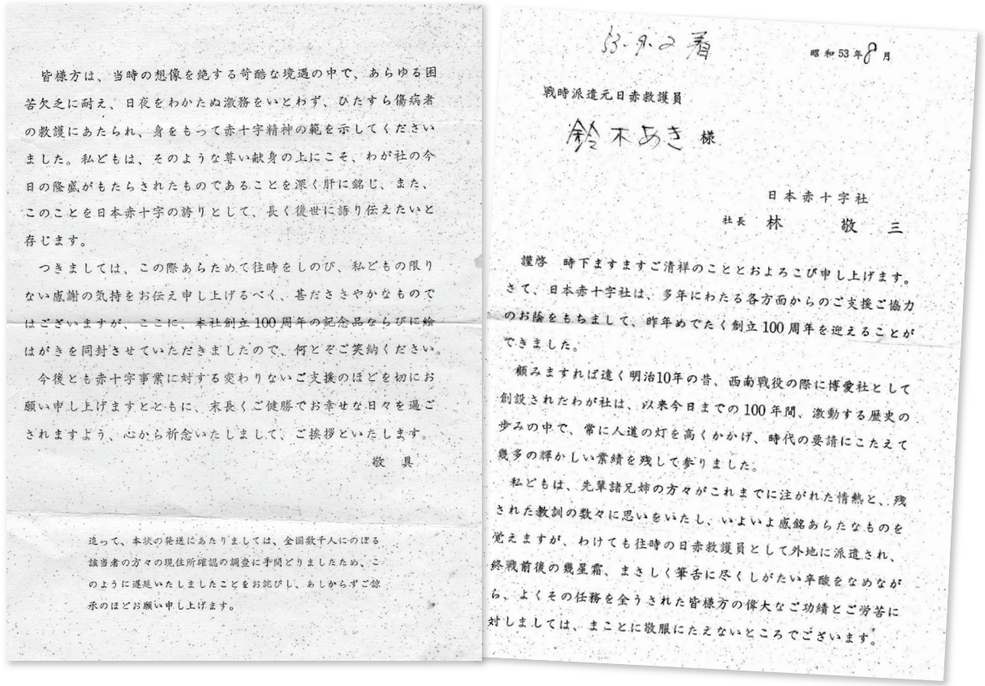


◇2007年に山形県退職女性教職員の会「出羽路会」で、発足40年を記念し、フィリピンスタディツアーを行った。母は参加しなかったが、報告書の最後に次のような会長の追記を見つけた。

出発前、まだどっさり雪の積もっていた1月6日のことだった。『なごみ会』の鈴木あきです。出羽路会だよりを見て、フィリピンのスタディツアーがあることを知りました。ヌエバエシハなど懐かしくて電話しました。私が前にいたところであり、戦争の生々しい記録の本があるので出発前に読んで行っていただきたい」ということだった。私は電話口で参加者がもう一人増えるのかと喜んだのもつかの間「もう歳で参加できない」とおっしゃるのだった(大正11年生まれ・84歳)。翌日さっそく住所を探し、お宅に伺って話ができた。「戦時中、赤十字の召集により看護婦としてフィリピンに行き、戦後は寒河江・西村山管内で先生をした。西川東部中にも勤務した」とのことだった。帰宅してから出発準備のまにまに借りた本を読み、この先輩はどの辺りで看護にあたったのかを知った。フィリピン全土が戦場だったが、パムパンガ州に日本陸軍病院があり、南太平洋の島々からの負傷者、病人を看護したのだった。

ツアーの最後にあった、最も貧しいパヤタスの(カシグラハン)地域で、14年も滞在しボランティアを続けておられるNGOフィリピンソルト代表石川雅国氏がパムパンガ州から通って活動しておられるのを知って一層感慨深いものがあった。

昭和53年日本赤十字社から届いた手紙



皆様方は、当時の想像を絶する苛酷な境遇の中で、あらゆる困苦欠乏に耐え、日夜をわかたぬ激務をいとわず、ひたすら傷病者の救護にあたられ、身をもって赤十字精神の範を示してくださいました。私どもは、そのような尊い献身の上にこそ、わが社の今日の隆盛がもたらされたものであることを深く肝に銘じ、また、このことを日本赤十字の誇りとして、長く後世に語り伝えたいと存じます。

つきましては、この際あらためて往時をしのび、私どもの限りない感謝の気持をお伝え申し上げるべく、甚ださささやかなものではございますが、ここに、本社創立100周年の記念品ならびに絵はがきを同封させていただきましたので、何とぞご笑納ください。

今後とも赤十字事業に対する変わりないご支援のほどを切にお願い申し上げますとともに、末長くご健勝でお幸せな日々を過ごされますよう、心から祈念いたしまして、ご挨拶といたします。

敬具

追って、本状の発送にあたりましては、全国数千人にのぼる該当者の方々の現住所確認の調査に手間どりましたため、このように遅延いたしましたことをお詫びし、あしからずご容承のほどお願い申し上げます。

昭和53年8月

戦時派遣元日赤救護員

鈴木あき 様

日本赤十字社
社長 林 敬三

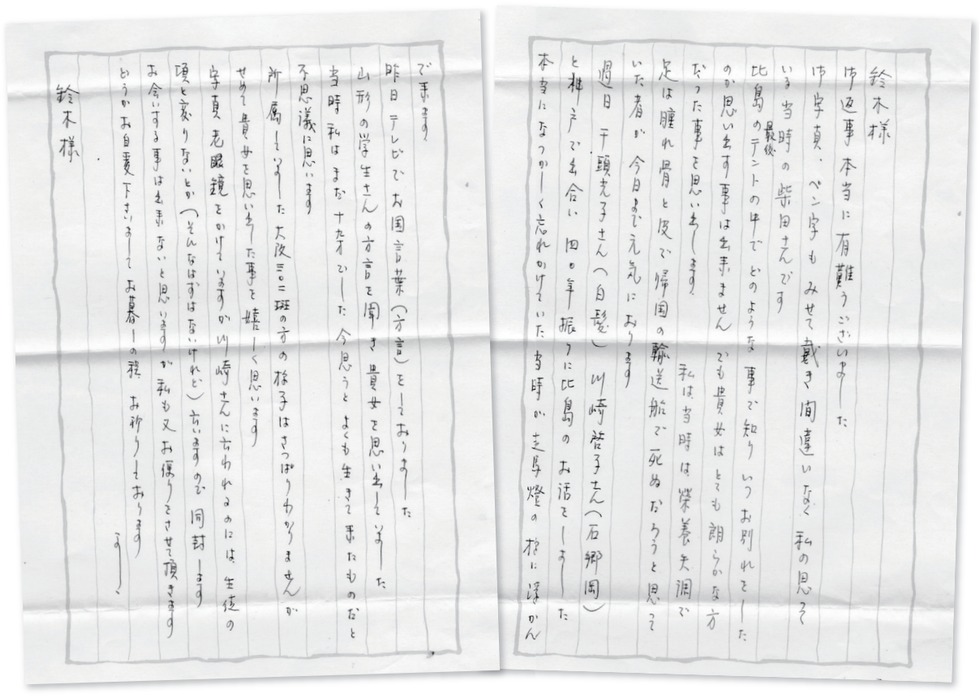
謹啓 時下ますますご清祥のこととおよろこび申し上げます。

さて、日本赤十字社は、多年にわたる各方面からのご支援ご協力のお陰をもちまして、昨年めでたく創立100周年を迎えることができました。

顧みますれば遠く明治10年の昔、西南戦役の際に博愛社として創設されたわが社は、以来今日までの100年間、激動する歴史の歩みの中で、常に人道の灯を高くかかげ、時代の要請にこたえて幾多の輝かしい業績を残して参りました。

私どもは、先輩諸兄姉の方々がこれまでに注がれた情熱と、残された教訓の数々に思いをいたし、いよいよ感銘あらたなものを覚えますが、わけても往時の日赤救護員として外地に派遣され、終戦前後の幾星霜、ままさしく筆舌に尽くしがたい辛酸をなめながら、よくその任務を全うされた皆様方の偉大なご功績とご労苦に対しましては、まことに敬服にたえないところでございます。

平成元年2月13日日赤時代の友人から届いた手紙(H1.2.13消印)



鈴木様
ご迷惑 本当に有難うございました
ご写真・ペン字も みせて戴き間違いなく 私の思う
いる当時の柴田さんです
比島の最後のテントの中で どのような事で知りいつお別れをしたのか思い出す事は出来ません
なった事を思い出します
でも貴女はとても朗らかな方
足は腫れ骨と皮で帰国の輸送船で死ぬだろうと思っていた者が 今日まで元気におります
私は当時は栄養失調で
週日 千頭光子さん(自殺) 川崎哲子さん(石郷岡)
と相手でも会い 四十年振りに比島のお話をしました
本当になつかしく忘れかけていた当時が走馬燈の様に浮かんでまいります
昨日テレビでお国言葉(方言)をしておりました
山形の学生さんの方言を聞き貴女を思い出しました
当時私はまだ十九才でした 今思うとよくも生きて居たものなと
不思議に思います
所属していた大阪三〇二班の方の様子はさっぱりわかりません
せめて貴女を思い出した事を嬉しく思います
字頁 老眼鏡をかけていますが川崎さんに云わせるのには生徒の
頃と変りない とか(そんなはずはないけれど) 云いますので同封します
お会いする事は出来ないと思いますが 私も又お便りをさせ頂きます
どうかお自愛下さいますようお祈りしております
敬
鈴木様



# ［前編］あとがき

祖母・あきが68歳の時に生まれたのが私だった。初孫。幼少期からとにかく可愛がってもらった記憶しかない。温かい背中におぶられ、散歩したぬくもりを今も覚えている。

昔から戦争体験については話を聞いていた。フィリピンのマニラに行った話はそれこそ50回以上聞いたし、マラリアの怖さについては幾度となく聞いたのだが、このように細かい話まで聞いた記憶はない。嫌なことを深く思い出したくはなかったのだろう。

戦争の資料に幼少期の私が落書きした事実も今回の一件で判明した。貴重な資料に落書きしたのに、怒られた記憶がない。優しい人だった。いつも笑っていて、温かい人だった。そんな祖母がここまで苛烈な体験をしてきたなど想像もできなかった。

『第一三八兵站病院戦史』という一冊の本がある。従軍士官の方が当時の記録をまとめたこの一冊には、当時の戦況、密林の中での混乱、看護婦の記憶などが事細かに記録されている。夜、この貴重な資料を読みながら、当時祖母はこの状況を生き抜いてきたのかと思うと、自然と涙がこぼれてきた。

祖母が自らの人生について、どのような想いを持っていたのかは分からない。生まれた時代が違えば、このような苛烈な体験をせず、幸せに暮らせていたかもしれない。しかし祖母が生き抜いてくれたおかげで私は生まれ、この文章を記すことができた。大好きな祖母に、私は出会うことができた。

[後編] 養護教諭になる

# 生き抜いて

1998(平成10)年12月、小渕政権時に突然届いた感謝状

鈴木あき 殿

あなたは先の大戦に際し戦地
事変地において旧日本赤十字社
救護看護婦として戦時衛生
勤務に従事されました
その御労苦に対し衷心より
敬意を表し慰労します

平成十年十二月八日

内閣総理大臣 小渕恵三

ここからは、母の話や自身の記憶をもとに娘の昌子が昔を振り返る。

昭和22年の春、あきは宮宿小学校から養護教諭の資格試験を受けないかという話をもらう。一度は断るが、今度は現職の養護教諭が家を訪れ、「とにかく試験だけ受けてみてください」と説得される。しぶしぶ受験したところ、意に反して合格してしまい、山形大学教育学部（当時は現在の山形北高校の場所にあった）で養成を受けることになる。看護婦の資格を持っていることが条件とされていたため、大学が夏休みの間に集中して行われる授業では看護の勉強はせず、教育学、心理学、自然科学の教科が中心。学内に宿泊しながら、缶詰状態で授業とテストを繰り返す日々。無事に検定試験に合格し、養護教諭普通２級免許状を取得した。

養護教諭として赴任した学校は寒河江・西村山管内の小、中学校が主。唯一、昭和38年４月～39年３月までの１年間だけ尾花沢市立高橋小学校に赴任したこともある。独身時代、通勤は自転車で。当時は珍しい光景だったらしく、「ハイカラ先生と噂された」と本人の弁。

後日談として、私が18歳の時に通った寒河江の平野自動車学校の男性教官に「あなたのお母さんにお世話になったんだ」と言われたことがある。宮宿中学校の生徒だったその教官は体育の時間に足を骨折し歩けなくなってしまい、今なら救急車を呼ぶところだが、母が背負って医者まで連れて行ってくれたとのこと。１５０㎝ほどの小柄な母が男子中学生をおんぶしていったことを想像するとその責任感の強さに感服するしかない。



独身時代は町場の学校に勤務していたが、娘が生まれてからはへき地での勤務が多かった。いちばん思い出に残る赴任先は朝日町立立木小学校だろう。

私が生まれてから、小学５年生までの通算13年間勤めた（前述の通り、１年間だけ尾花沢市立高橋小学校）。自宅のあった宮宿から立木まで通勤する。昭和30年代、バスは宮宿⇔水口間だけを運行していた。水口から立木小学校まで５㎞ほどの距離を、生まれたばかりの私をおんぶし、吹雪の日も歩いて通う。

あきが仕事をしている間、娘は地区の阿部家で子守りをしてもらっていた。愛称「あっか」と呼ばれていた、村ではちょっとした有名人のばあちゃんと、穏かなじいちゃん夫婦に本当の孫のように可愛がってもらった。

地域性や時代的に山の中の小学校は緩く、あきは娘を学校によく連れて行った。背が低かった私は、職員会議の時にはあきの机に隠れて会議が終わるまでじっと待っていたり、日直の時は朝から夕方まで